山崎郷土報

No. 94
11.9.10

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62-2000

『宍粟藩の終焉期』

堀口春夫

延宝五年（一六七一）丁己正月八日、藩主松平豊前守政元公御遠行される。御書置により、末期養子に備前岡山の藩主松平伊予守綱政の次男次郎丸を世嗣とし、板倉市正（いちのかみ）より、大老酒井雅楽頭忠清を通してようやく幕府に跡目相続が認められ、家臣一同ほっとした事であったが、新藩主次郎丸は未だ年齢三才にて、漸くは岡山城内の母上の元で過ごし、宍粟は城代家老宮野頼母が一切を取り仕切る事になった。岡山では伊予守の近習水野三郎兵衛と宮城大蔵とが世話役をし、江府では渕本弥兵衛が仕置きしていた。

以下『宍粟日記』より抜粋します。

延宝五丁己三月廿一日、公儀本丸殿中に於て御跡目次郎丸様（綱政公次男）へ相違無く御せ付けなされ候由、池田信濃守様（政言綱政公異母弟）へ仰せ渡され候。

同月晦日、次郎丸様御名数馬様と御改め成され候。以後家中の者皆数馬様と御申し上げ奉られ候事。

同年四月廿三日公方様（将軍家綱公）へ御跡目の御礼に御袷せ六領黄金十枚上げる、同日備中直次の御刀献上す。弥兵衛御名代にて、蘇鉄の御間迄持参仕り候、光政様、大御前様（光政公室は本多忠刻室千姫、天寿院の女（むすめ）勝子である）綱政様御前様（綱政公

目次

①『宍粟藩の終焉期』　堀口春夫……1
②『江戸時代の宍粟郡内梵鐘集成Ⅲ』　片山昭悟……6
③山崎町歴史街道（こ）（ち）　会報部……11
④春の研修旅行「阿波路を訪ねる」記　志水美好……15

室真證夫人）へ御祝儀物、弥兵衛御名代にて持参仕り候。同月晦日光政様御前様へ政元公御遺物、弥兵衛持参仕り候。同年四月廿七日、光政公より御袷せ二領大御前様より銀子三枚綱政様より御袷せ三領、御前様より御袷せ二領弥兵衛に下さる。

同年五月十二日朝、綱政様にて御料理御相伴御盃下さる。御膳過て、宍粟への御用共仰せ付けなされ御懇の御意、球昌院（政元公の生母）息災の様子御尋ねなされ、御召し綿入御紋付御羽織弥兵衛に下さる。同日数馬様御道具の内、綱政様御意として、片付の御茶入、養ト筆富士の御懸物を下され、宍粟へ罷り立ちて候様にと仰せ付け、有難く御礼申し上げる。同月十六日に江府を立ち宍粟に帰る。家中の者共に御意の趣申し渡す。

久世大和守広之様（幕府老中）ヨリノ書翰を左ニ掲載ス

昨日は富田善右衛門方迄入り来り申し聞され候趣とく承知候、頃日大井新右衛門書付御持参候、豊前守殿御後室へ数馬殿より御合力一ケ年銀拾貳匁宛の筈相定め候段新右衛門相進め埒明致され満足の由其の意を得候。今朝ヨリ伊予守殿も御礼状下され候。次に去年御遺しの趣の銀子四貫目の事も板倉市正殿へ申し候間、勝手次第に差し越さるべく候、其の方明日宍粟へ相越しなされ候由家中の衆へ相心得給るべく候　以上

久世大和守

五月十一日

渕本弥兵衛殿

同年八月二十三日岡山へ参る。同廿四日朝登城仕り候様にと仰せ付けなされ御目見得仕り、諸御用共聞かされ候間廿五日の朝御料理下されの旨御直に御意、数馬様へ参り御目見得仕る。弥兵衛側へ寄りなされ御玩具を差し上る。同廿五日、登城、綱政様弥兵衛を召しなされ、病気の由聞きなされ、其の上恒元公政元公両御代御奉公もよく勤め、政元公御病中存じ入りに候、緩々養生なさるべく仰せ仕り、唯今迄の役儀御免、家老役仰せ付けなさる由、数馬様の御為宜く仕るべき御意、有難く御請け申し上げ、箱肴を以て御礼申し上げる。即刻御膳出る。御相伴仰せ付けなされ、御盃御肴下され候、同日数馬様へ太刀を以て御礼申し上げる。同廿六日岡山を立ち宍粟へ帰る。

「宍粟へ帰った渕本弥兵衛は肩の荷がおりて疲れが出たと見え、病床に伏したらしく其後の記録が見当らない。漸く空白になっている（筆者注）」

延宝六年八月数馬様五歳に成りなされ御紐落しの御祝いなされ、同年午九月将軍家（家綱公）に初の御目見えなされ御挨拶の為江

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-25　兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL（0790）62－7588
FAX（0790）62－7589

府に参勤備前岡山を御発駕途中一夜山崎の府に御泊りなされ家中一同御目見え、翌日早速参勤の供揃えを調えなされ渕本弥兵衛は病気療養中にて船元まで御見送り。

同年戌午十一月七日御繁殿より完甘宇右衛門を御使いなされ、来る十五日吉日に候間御歯黒召し初の筆私妻に上げ候得と仰せ下され、同月十五日御しげ殿へ御祝いの御道具御樽私妻より上げる、私も御肴上げる朝御祝の御料理くだされ、同日御繁殿御使いを以て金子五百疋御肴を私に樽くだされ、廿七日晩御繁殿弥兵衛宅へ入りなされ御膳を上がる。鴨一羽、小杉原弥兵衛に御肴妻にくださる。弥兵衛も中院通茂卿筆の詠歌大概一冊上げる。

延宝七年己未正月六日、晩八ツ時分江府御使者村瀬段右衛門参り、綱政様御意には数馬様旧冬御風邪気に候て其の後御疱瘡なされ、十二月廿七日夜御遠行なされ候間御家中の者町在共に騒動仕らざる様に申し付け候へと仰せくだされ、翌日段右衛門帰る。

延宝七年四月朔日御老中御一座にて大井新右衛門へ仰せ渡され候由、数馬様御跡御潰れなされ候由、屋宅の儀は家中銘々に下され候間、当六月中に相渡し候様に仰せ渡されの旨大井新右衛門殿仰せくだされ候。同月十二日江戸より日置猪右衛門参り、江戸より牧野弥次右衛門参る。綱政公御意には数馬様御跡御法に候得ば御潰れなされ候何れも不便に思召し候、然る上は備前備中御城下の内にても勝手次第に居り申すべく候、何れも神妙に仕り候得との御意の旨、弥次右衛門申し渡す。私儀は引き渡し迄相詰め候様に仰せ付けなされの由、十二日五拾人扶持方くだされ候間岡山へ参り候様にと日置猪右衛門申し渡す。有難く存じ奉る旨御請け申し上げる。屋敷も牧野又兵衛本屋敷御借りなされの旨仰せ付けられ候。

同年九月幕府御代官服部六左衛門宍粟御請け取り。

同月廿二日上使衆御越し御引き渡しこれ有り候。同廿三日上使衆御立ち、弥兵衛も宍粟を罷り立つ。球昌院様願に付き和意谷へ参る。同廿五日岡山へ参り候。同月廿八日綱政様へ御目見得仕る。

「弥兵衛は残務整理と引継ぎに大変だったであろう。城代家老の宮野頼母も疲れと共に同年山崎で病死している。墓は興国寺裏に有る。（筆者注）」

ちなみに一寸当時の様子を『宍粟郡守令交代記』から見てみよう。

延宝六年午九月池田数馬殿入府、知行高同じ、備陽より東武へ御越しの次第序に当府に入り給いて、一夜御滞留。翌朝発駕。

同年十二月二十七日、逝去歳五才。法号、幻覚妙漚童子、知邑わずかに二年、同七年未四月御家断滅す。屋形等並びに遺物

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS
本　店
山崎町さつき通り　TEL(0790)62-0700
FAX(0790)62-2117
ブックランド店
山崎町中井　TEL(0790)64-2051
FAX(0790)64-2052

は備前の国主伊予守殿に下さる。家臣の家も銘々に下され、すべて皆沽却す。既に宮室変じて荒野にならんとす嗚呼父子三代、わずかに三十年にして滅亡せり。郷邑始まらざるにあらず。

何ぞ寂からざるや、此とき此地、備前の城主に御預け、故に、家臣日置伊右衛門、当府に来り、暫く居守せり。

延宝七未年、三万石公領となる。御代官・服部六左衛門支配のよし、同五月に其の告到来す。是によりて町中名代として龍野屋孫兵衛、同六月東武に到り、六左衛門に見礼す。当地の様子、御尋と聞えし。同年九月廿九日、六左衛門当府に到着、御宿、山崎町龍野屋孫兵衛、然る処に当守、和州郡山より当府へ御所替のよし東武より其の告有り、これによって六左衛門安志村へ御引きとり、旅館奈良屋治右衛門、さて、郡山へは英賀屋弥次兵衛参り使いたし。本多家御家老中御役人中に謁見す。当地の様子、御尋ねと聞えし。

延宝七年未十月十九日、本多肥後守政貞が、入府。船元の一雲寺に休息し服部六左衛門に対面、池田

きれいなカラープリントの店

Specialty Camera Shop
コーエーカメラ

本店　宍粟郡山崎町東鹿沢26－3　☎62－2089
フリーダイヤル　☎0120-440-990
FAX0790-62-7429
咲ランド店　TEL0790-63-0533

豊前守政元養子数馬の遺領三万石の内二万石は公領となり、壱万石は本多肥後守の領地となり申す、と挨拶を交し共々町に入る。町役人の出迎えで町は、整然としていたが、家中は全くの荒れ放題、家中の屋敷は堀と門を残すのみにて建物は事如く取り潰され、道具共々売り払われ、わずかに家老屋敷が残るのみにて、一旦大手前の宮野頼母の屋敷に入り頼母の次子宮野角左衛門と、多賀長太夫の忰多賀理助に会う。仕置き家老の日置猪左衛門は備前へ帰り、二人が留守居役。服部六左衛門も家中の荒れ様には唖然とし、気の毒そうに、「肥後守殿、一藩の潰れる事は大変な事にて、幼君の急死にて家中は騒然となり、しかも半年余の空白時代がかくの如く荒れ果てたもので御座ろう。」「肥後守殿…貴殿の一万石は此の町を中心にして良き御領地を御存分にお取り下されと。」町年寄龍野屋孫兵衛と英賀屋弥治兵衛に協力を依頼して、自分は遠慮して安志村に引きさがった留守居の宮野角左と多賀理助の二人は、一言の言葉も出ず唯々涙にむせていた様であった。政貞は当分宮野頼母の屋敷に居て町年寄の協力を得て家の材木や道具の買い戻しに奔走した。二人の留守居も日置猪左衛門の言い残した御領山の材木売り渡しの残金を提出して協力したと言う。延宝七年十一月廿一日御上使石尾七兵衛、島治左衛門江戸より到着翌、廿二日引き渡し有り。御代官服部六左衛門安志より来会あり宮野亀之助、多賀理助立会の上御上使より本多家に引渡す。多賀長太夫の忰多賀理助は後に本多家に仕えている。

備後守以来の家来は、少将様よりの附人だった家老用人級、其

の他馬廻りの物頭達、二百～百五十石以上の武士は大方備前へ呼び戻されているが、あとの大部分は浪人となった様である。又備後守が宍粟へ来てから召し出された地方知行の地侍達は弥兵衛や日置猪左衛門の嘆願によって服部六左衛門より郷土待遇として残してもらった様である。安積忠左衛門は弥兵衛の妹婿であったし、波賀の中村氏や釜内半平、九鬼平内等々、その他の大部分は浪人となり、当時備前岡山城下へ追い駆けて行き、たとえ半知微録でも召し抱えられたいと、旭川の橋下や土堤下に堀建て小屋を懸けて住み付き、見苦しくて仕様がないと役人から立ち退きを命ぜられたがなかなか退かないので、少将様のお声がかりもあって備前備中の内にて帰農帰商するなれば、しかるべき土地と資金を与えるとの仰せあり、又和意谷にて主人の墓参りする者にはいくらかの扶持を取らすから土手や橋下を引き払えと命ぜられている。百姓となっても刀差す事勝手たるべしとの仰せにて半士半農の待遇で仰せられかなり多くの者が帰農したようでもある。岡山県の地図を見ても備中の総社のなかに宍粟と言う駅があったり、山崎と言う地名があったり又池田家の菩提寺曹源寺へ行く途中山崎村という村もある。又天守閣内に展示されている元禄時代山崎町と言う通りがある。おそらく宍粟から呼び戻された家臣達の屋敷があった町ではなかろうか。家老の渕本弥兵衛も郭内に屋敷をもらい寄合詰になっている。知行は千石から二百五十石になっているから何れも多少減封されている。又渕本家の系譜には天和二年頃から多少さか登って『続宍粟記』としての記録はあるがいずれも山崎断絶後で、伊予守綱政より数馬の死により御家断絶を知らされ家断絶後の当座は本人も病気や断絶後のショックと引継の忙しさで記録どころでは無く空白の時代になっている。山崎でも帰農又は帰商した浪人もかなり居る様である。

岡山にてその後の弥兵衛の記録

延宝七年十一月三日、御繁殿川下へ川船にて御越しなれに付き弥兵衛御供仕り候様に御繁殿仰せ付けられ、此の時御繁殿へ岡山にて初めて御目見え仕り候。同月十七日御対面所へ綱政様入りなされ、御繁殿御一座にて弥兵衛を召しなされ、色々有難き御意の上、弟弥三左衛門（保儀）御当地へ参り候由時節悪敷候得ど、盃と御意遊ばされ候、同八年庚申正月廿九日、日置左門より明朔日より恒元御祠堂御名代朔望の御拝相勤め候様に仰せ付けられ、允四季の御祭の時御名代相勤め申し候様仰せ付けられ、是により弥兵衛も罷り出で相勤め申し候、天和三年亥年三月十一日御繁殿江府へ御立ち、和意谷へ御参詣に付、弥兵衛も御供仕り、同十二日和意谷より帰る。

『江戸時代の宍粟郡内梵鐘集成Ⅲ』

―寛政・享和・文化・文政・天保・弘化・安政・文久―

片山昭悟

はじめに

宍粟郡内の梵鐘について、寛政、享和、文化、文政、天保、弘化、安政、文久にかけて江戸時代の後期のころの梵鐘を紹介する。

寛政五年（一七九三）三月に仏心寺の一件があってから寛政のころの長谷川氏の梵鐘、喚鐘の鐘銘について調査すると、それぞれに特徴がみられる。

また、文化・文政のころの金屋村長谷川氏について、段村の松井太郎大夫についても興味深い記録がある。

◇寛政のころ

千種町千草長永寺の鐘銘は、

『宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写し』によると、

「勅許

御鋳物師

當郡金屋之住

長谷川孫兵衛尉藤原吉則

長谷川五郎兵衛藤原家次

干時　寛政六年（一七九四）甲寅四月朔日」

長谷川氏の梵鐘ではじめて「勅許　御鋳物師」の銘がみられる。

一宮町公文の實際寺鰐口銘は、

「寛政六（一七九四）寅暦

現住學海代

世話人落忠右衛門

公文邑　實際禅寺」

一宮町西公文の薬師堂鰐口は、

「寛政六（一七九四）歳寅八月大吉日

播州宍粟郡三方公文邑

川上大明神惣氏子敬白」

一宮町公文の實際寺鰐口と同じ年のものである。

このころの一宮町には、仏堂の正面の軒下に吊り下げてある鰐口が多くみえる。

一宮町福知の成観音堂鰐口は、『ふるさと福知』によると、寛政七年（一七九五）二月のものである。

安富町塩野の了円寺喚鐘は、

「寛政九（一七九七）丁巳歳

二月　日

同郡住

冶工　長谷川孫兵衛

藤原吉則」である。

同じ年の寛政九年（一七九七）再鋳の山崎町小茅野位王神社鐘にも長谷川孫兵衛尉藤原吉則とある。

山崎町小茅野の位王神社梵鐘は、

「寛政九丁巳歳二月再鋳之
勅許冶工　當郡金屋村住
長谷川孫兵衛尉藤原吉則」

この鐘には「勅許冶工」と陰刻されている。勅許とは朝廷から許可された鋳物師とされる。

また、「長谷川孫兵衛尉藤原吉則」とある。寛政四年（一七九二）の神福寺鐘にも「尉」がみえる。「勅許」とあることや、下帯に菊紋があることなどから太平洋戦争時に供出を免れた経緯がある。

現存する江戸時代の長谷川氏の梵鐘では、桓武伊和神社の梵鐘とともに重要な資料である。

一宮町西深の薬師堂鰐口は、

「寛政十二（一八〇〇）申七月
森氏因州鳥取之住
藤原丹波守正次」

波賀町上野の井之谷半鐘は、

「寛政十二（一八〇〇）庚申十月吉辰
冶工　姫路　瀬川安ェ門藤原正明」

冶工は姫路野里鋳物師の瀬川安ェ門である。瀬川氏のものはこの半鐘のみである。

なお、この鐘には「播州完粟郡西谷　上野村山田井之谷山行者大菩薩半鐘」と刻まれている。

◇享和のころ

山崎町川戸の道場元喚鐘は、

「享和二（一八〇二）壬之冬
勅許御鋳物師當郡金屋住
長谷川氏藤原吉則作之」

寛政九年（一七九七）位王神社の梵鐘を再鋳した五年後にあたる。この鐘にも「勅許　御鋳物師」と陰刻されている。長谷川氏のなかで藤原吉則名は多くみられ、勅許がみえる長谷川氏の代表作である。

◇文化・文政のころ

一宮町百千家満の満福寺喚鐘は、

「文化五（一八〇八）戊辰年七月吉日
冶工　同郡金屋住
長谷川氏藤原吉則」

山崎町川戸の道場元喚鐘の四年後にあたる。長谷川氏の現存す

るもので藤原吉則名としてはもっとも新しい。

山崎町中野の徳王寺喚鐘は、

「文化十四年（一八一七）

御鋳物師　同郡住金屋村

勅許

長谷川孫兵衛藤原吉久作之」

この鐘にも「御鋳物師　勅許」がみられ、長谷川孫兵衛藤原吉久である。藤原吉久は宝永元年（一七〇四）の一宮町御形神社鐘が知られる。現存する鐘であり、古くには飢饉に吊り下げられているのを降ろして川に漬けてお祈りをしたと地元で伝えられている。龍頭は双龍であり、龍は雲と雨を呼ぶとされ水は深く関わりがあるようである。

『山崎町史』「庄家蔵鋳物師文書」によると、文政二年（一八一九）に金屋村長谷川孫兵衛は、町人七人に対して内緒で鍋や釜を販売していたと抗議している。

町人の七人とは、

門前町指物屋徳兵衛

本町鉛屋喜左衛門

同町砂屋善五郎

福原町京屋忠蔵

同町米屋吉右衛門

北魚町番屋与右衛門

同町紺屋次兵衛

次の年の文政三年（一八二〇）春から鍋、釜など一切売買をしないことになった一件が見られる。しかし、文政三年八月には北魚町紺屋次兵衛が川嶋・鍋屋の指図にしたがって商売をすることなどを誓約して金屋村鋳物師の販売権を入手しているが、文政六年（一八二三）には、詫び証文一札を長谷川孫兵衛に差し出している。

文政十二年（一八二九）の一宮町常楽寺鐘や天保十五年（一八四四）の千種町仙光寺鐘は、「賣元　姫路龍野町油屋岩蔵」である。

千種町室の西方寺喚鐘は、「維時　文政十一年（一八二八）仲冬」である。冶工は見られないが、三十センチ大の宍粟郡でも小さい鐘である。

一宮町百千家満の常楽寺喚鐘は、

「文政十二（一八二九）丑晩秋

賣元姫路龍野町三丁目油屋岩蔵

播州宍粟郡三方庄百千家満邑

不変山常楽寺什物」

この鐘の「賣元姫路龍野町三丁目油屋岩蔵」は、天保十五年

（一八四四）の千種町仙光寺鐘にもみえる「あぶらや　岩蔵」と同じであり、龍野町三丁目は姫路城の西方に位置する。

文政十二年（一八二九）に長谷川孫兵衛、長谷川五郎兵衛に真継家当主康寧より鋳物師職の許状が発給されている。長谷川氏は二年後にあたる天保二年（一八三一）、天保四年（一八三三）に、江戸時代としては最後の二つの鐘をつくったのであろう。

これを境にして長谷川氏は、一時途絶えていくのである。

◇天保のころ

南光町上三河の光福寺喚鐘は、

「天保二年（一八三一）再興

勅許　左方惣官御鑄物師

當國宍粟郡住

大工職長谷川孫兵衛

藤原恒光」

太平洋戦争で供出していたものが、平成四年（一九九二）に姫路市飾磨区の寺院より里帰りしたもので、長谷川孫兵衛藤原恒光は、『山崎町史』によると、天保四年（一八三三）の山崎町岸田の明宝寺鐘にもみえる。この鐘は安政元年（一八五四）に大砲鋳造のために差し出されている。江戸時代の長谷川孫兵衛の作としてはもっとも新しいものである。

安富町安志の光久寺喚鐘は、

「天保十（一八三九）亥年九月吉日

勅許　御鋳物師

長谷川孫兵衛　代福岡休作」

天保十一年（一八四〇）十月に長谷川五郎兵衛より段村松井太郎大夫に鋳物師の権利が移っている。

段村松井太郎大夫は、天保十一年十月付「天福元年蔵人牒写」「大工職之事」の許状を得ている。

『山崎町史』によると、『覚帳』に、天保十二年の六月には二十五日に職場を普請、廿六日の朝吹初仕度申渡している。

『御形神社文書』によると、二年後の天保十三年（一八四二）四月二十一日に御形神社鐘を長谷川孫兵衛代理の伊三郎がつくっている。

千種町西山の仙光寺鐘は、天保十五年（一八四四）の鐘で、現存する。

「天保十五年（一八四四）甲辰二月日

播磨國

宍粟郡西山村

文珠山

仙光寺

賣所　龍野町三丁目

あぶらや岩蔵」

◇弘化のころ

安富町瀬川の妙福寺喚鐘は、弘化二年（一八四五）であり、

「姫路　田中鋳之
維時
弘化二　己巳年
秋八月八日
播州三木郡吉田村妙覚寺什物」とある。

◇安政のころ

次に山崎町中野字久住の光明庵喚鐘は、安政二年（一八五五）二月である。冶工はみあたらない。

山崎町岸田の明宝寺梵鐘は、海防の大砲鋳造のため安政元年（一八五四）に差し出している。長谷川氏の作とされる。

安政三年（一八五六）三月に大砲造りのため各寺院の梵鐘を差し出す旨触れが出され、四月に大砲を鋳造している。

◇文久のころ

山崎町高下の法傳寺喚鐘は、文久元年（一八六一）十一月三鋳で現存する。

「勅許鋳物師
金屋村住人
長谷川孫兵衛藤原吉則
後見西新町住人
大工長谷川藤蔵藤原安章
下職丹州福知山住人
釜屋源兵衛作之」

鐘銘

享保十七年（一七三二）二月初鋳
弘化四年（一八四七）十一月二鋳

江戸時代の宍粟郡の現存する鐘ではもっとも新しいものである。

「下職丹州福知山住人　釜屋源兵衛」とある。釜屋源兵衛については、福知山の鋳物師には見当らず山城國京三条釜座の鋳物師のなかで釜屋と名が付くのは、清右衛門や源兵衛がみられる。これから福知山に移住したのではないか。法傳寺とはつながりがあったのであろうか。

鐘銘によると、長谷川孫兵衛藤原吉則の後見が西新町住人の長谷川藤蔵藤原安章とされる。

おわりに

江戸時代の宍粟郡の梵鐘について、山崎町の梵鐘を考える上で重要であり、年代ごとに集成を行なった。宍粟郡には未調査の梵鐘もみられる。今回拙稿を紹介することにより、新資料が増加したり、冶工名が明らかになることを期待したい。

なお、宍粟郡の梵鐘集成については、『兵庫県神社誌』昭和十

三年、江戸時代とされる「宍粟郡内寺社ノ鐘銘写し」、安井俊二「山崎町梵鐘銘写」、宇野正碩『宍粟鉄山並金屋鋳物史料』平成元年、『山崎町史』昭和五十二年、梵鐘については、坪井良平『日本の梵鐘』昭和四十五年、鋳物師については、笹本正治「近世真継家配下鋳物師名録一、二」『名古屋大学文学部研究論集』史学二十八号　昭和五十七年、二十九号　昭和五十八年などを参考にさせていただいた。また、宍粟郡内の梵鐘調査にあたり寺院、神社はじめ多くの方々にご教示や貴重な資料をご提供いただいた。厚くお礼申し上げます。

「山崎町歴史街道」(二)

会報部

――山崎町の史跡めぐりをしませんか。――

私達郷土研究会は郷土の誇りである史跡を大切にし、後生に伝えるため、今までにも沢山の案内標柱（石柱）を建立してまいりました。そこでこれらの史跡を山崎城本丸を手初めに、前号から本紙上へ順番に掲載していきますのでどうぞご利用ください。

(四) 本多侯下屋敷跡（西の二の丸）

現在山崎文化会館と文化体育館が建っているところが、その昔の西の二の丸であり、本多侯下屋敷跡です。

ここは東西に内堀、南は石垣と城壁に囲まれ、北は本多町と称する武家町に面し、武者格子窓を配した長屋門を連ねていました。邸内には西御屋敷と称した藩主の家族と奥方や腰元衆の住居でした。維新後母屋は取り壊され側室の居間であった別棟だけが残り、本多家の家族が昭和の初め頃まで住んでいました。この建物は現在本多記念館西隣りに移転しています。

また、西御屋敷跡は昭和二三年山崎中学校校舎が建設され、昭和六二年には現在の文化会館が建設されました。

(五) 埋御門跡

文化会館駐車場の南端東側に石段があり、そこを下って東へ上がる所に門がありました。この門が埋（うずみ）御門でした。

本丸には四隅に角櫓（すみやぐら）があり、特にここ西南の角櫓の下には二の丸である藩主の邸へ通ずる門となっており、埋御門という立派な櫓門でした。

埋御門には次のような

俚謡(りよう)があります。

「山崎に　すぎたものが二つある　埋御門に荻太の娘」

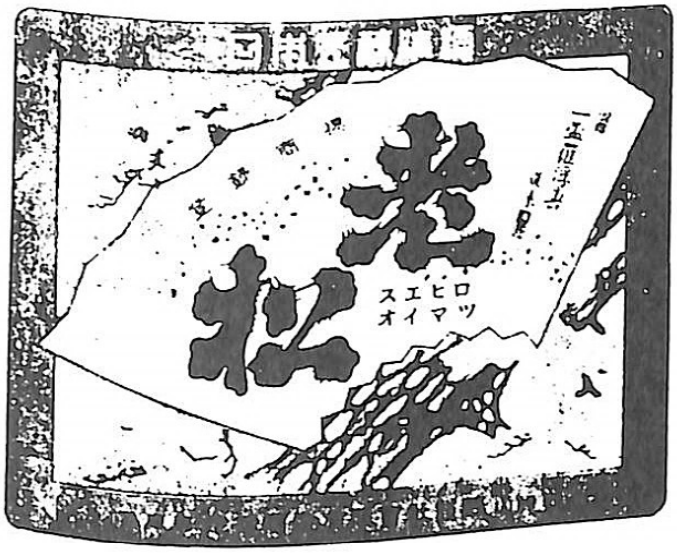
(六) 桜の馬場跡

現在の本多公園、即ち本丸から二の丸へかけての崖下には、昔、元和元年池田輝澄が最初の山崎藩主として築城した当時は、城の南側崖下に幅十メートル程の堀がありその内側に馬場がありました。また本多氏封入後は堀は埋められ幅二メートルの溝川になりましたが、その堤に接して東西に長く伸びた三〇〇メートル近い馬場ができました。そして馬場の北側の本丸から二の丸にかけて崖下には桜の木が沢山並んでいたので桜の馬場と言いました。

また一方この西方の菅野川に近く、犬の馬場という地がありますが昔、沢山犬を飼っていた処といわれ、また昔寺があったので院の馬場とも言われました。

(七) 外堀跡

武家屋敷と町家との境界に外堀がありましたが、



完粟山崎之絵図　松平周防守時代　池田家文庫　岡山大学図書館蔵

鹿沢地区を取り巻く地域に当たります。つまり門前から清水口まで東西に長く延びた外堀があり、幅の広い処では三間（約五・四㍍）もありました。俗に三間堀ともいわれ、小舟でお切り米を運んだり、また夜警の見廻りにも使われました。

外堀の北側の町家の町筋は戦略的意図のもとに特異な町筋が作られ、また、山裾には社寺が配置されていました。

（八）中御門跡

中門は、城下町から大手前に通ずる中央の門でありますが、現在の役場東の交差点信号を二〇㍍ばかり北の鍵状の処にありました。昔この門から南へ外堀を渡って三の丸に入り、更に中堀の表門を通って二の丸に入り、内堀の紙屋門を経て本丸に入りました。

このほか、この門の東方に角鷹門、西方に土橋門があり、そして門前にはいずれも枡形の広場があって木戸があり、その一角に番所がありました。また、鹿沢の東に黒門が、南の龍野口に新門、西の犬の馬場には鶴木門があり、以上六つの門で三の丸への入り口を固めていました。

（九）城下町町筋の遺構

さつき通り等の町筋を歩いて気がつくのは、通りが所々鍵型になっており不思議に思いますが、これは城下町造りの名残です。

姫路藩主池田輝政の四男輝澄が元和元年に宍粟郡三万八千石の山崎藩主となった時、山崎はそれまでの市場町から城下町へと変わりました。

その後、輝澄は佐用郡を加封され六万三千石となり播磨では姫路・明石に次ぐ大名となりました。

輝澄は徳川家康の外孫で、本丸を中心に堅固な城郭を構えました。また城下町防衛のためには、このさつき通りのような鍵型と丁字型の町筋を併せて、迷路として万一の外敵侵入に備えました。平時においても清水口・鴻の口・門前口等すべての出入口に木戸を設けて防衛を厳重にしました。

（十）清水口見付御門跡

青蓮寺の南の道路、ここは昔姫路から鳥取への因幡街道でした。その下り坂の所に山崎藩城下へ入る関所として冠木門（かぶきもん）がありました。その門外に枡型という広場や番所があって出入りの者を調べていました。清水口の他、鴻の口・門前にも同様の門がありました。

その昔、門の西三〇㍍ばかりの道端南側に、き

コーヒーハウス
らふ
山崎文化会館西
☎62－8559

れいな水が湧き出ていて、民家は飲み水とし、また旅人は喉を潤しましたので、清水口の名がつきました。そして、この水が有名になり、道の北側に茶店が出来て大変よくはやっていました。ところが慶長五年（一六〇〇）輝政の臣中村主殿がここへ代官所を置いて着任しました。

元和元年（一六一五）輝澄が山崎藩主となってから、その跡地へ姫路野里より、祖母蓮葉因（家康側室西郡の局）の菩提寺青蓮寺を移築しました。今も輝澄の実母督姫（家康の次女）の霊と共に祀る御霊廟があります。

（十一）土橋御門跡（石柱場所　西町門前屋東側）

山中医院南側の門前屋の東通りにこの門がありました。この門は、家中から商家へ通ずる門ですが、これより南約三〇〇㍍の所にも院の馬場の惣門（通称ー鶴木御門）がありました。南部の城下の村人はこの鶴木御門をくぐり、通り町を歩いて土橋御門を出て町へ買い物に行きました。そのため家中内で昼間最も通行量が多かったので通町と言いましたが、土橋御門も通行量の多い門でした。

昔は土橋御門前より西新町から本町へかけて商家の町並みが続き最も繁栄した所でした。

（十二）鹿沢搦手門跡（石柱場所　山崎小学校体育館東門前）

山崎小学校体育館東門の所に搦手（からめて）門がありました。ここは鹿沢城の裏門となっていた所です。

元和元年の築城当時より松平（池田）三代の三万石時代までは、城の大手口となっていました。しかし本多氏一万石の陣屋となってからは、いつとなく搦手となり、大手は中門南の北側入口となりました。

幕末には、年貢米収納の時期だけ門は開かれ、普段は閉じられていました。ここより南は石垣の断崖で道はありませんでしたが、明治一〇年代に旧藩士遠藤亘氏の発案によって新たな道路が出来ました。よってこの坂を遠藤坂と言いました。

（十三）大手前（石柱場所　役場庁舎東）

役場庁舎の東角に大手前の標示石柱が立っていますが、この辺りの地は鹿澤城の大手前にあたります。その昔、本多家筆頭家老武間清左衛門の屋敷地でありましたが明治末期に一部は工営所となり、他の一部は技芸専修学校の寄宿舎の敷地となりました。

大正二年には宍粟郡立実科女学校が出来ました。そして大正八年に郡立実業学校と改称、大正十二年に郡制廃止にともない県立山崎高等女学校となりました。そしてまた昭和二十二年に県立山崎高等学校となりました。しかしこの高等学校は昭和三十二年に加生の地に移転し、昭和三十三年に山崎町役場がこの地に移転して来ました。

春の研修旅行
「阿波路を訪ねる」記

志水美好

五月二十三日、研修旅行で四国徳島を訪れる日が来た。天気予報では西の方から雨が近づいて来るとのことで、今日の天気が心配だ。何とか晩まで降らないでと祈るばかりだった。参加者八十四名と聞き盛会を喜び合う。常連の方々に前以って旅行の予告のはがきを出したり、老人大学の方々へも参加を呼びかけたり、研修部としてもいろいろと手を尽くして下さった甲斐があった。

山崎をあとにして、播但道、山陽道を経由、三木ＪＣから淡路鳴門自動車道へと山の中の新道をひた走る。交通量が少なく順調に進む。三九三三ｍの明石海峡大橋も瞬時に通過して淡路に着く。淡路ＳＡでトイレ休憩。展望を楽しむ間もなくすぐに出発。

一時間程で淡路は素通りして四国へ渡る。ガイドの堀野さん若いがなかなか上手だ。淡路花博、世界平和大観音像、野島の震災記念館、伊弉諾神宮とおのころ島の神話、先山の千光寺、三原の玉葱、鳴門の渦潮の話し等々を聞き乍ら、退屈する暇もなく淡路の風物を楽しむことが出来た。大鳴門橋を渡り、恰美術館を目で探している内に四国へと着いていた。鳴門ＩＣから一般道に入り霊山寺へと車を走らせる。

霊山寺　四国八十八ヶ所第一番札所で遍路用品のそろった売店が繁昌していた。朱印帳に印をもらってから本堂に詣る。さすがに大勢の参拝客で本堂前は混雑していた。多宝塔は修理中で大きな素屋根に覆われている。正面の池にはきれいな緋鯉が群れている。境内めぐりはやめて山門をでる。一番札所の大きな標石と山門を撮って車へ戻る。暫く待って全員がそろうと早速出発。

藍の館　霊山寺を後にして程なく藍住町に着く。駐車場が満車だったので路上で車を降りて歴史館（藍の館）を見学する。新館の展示物や説明を

呉服とジュエリー
とくさや
本店　本町（さつき通り）62-1680
咲ランド３Ｆ呉服のとくさや　63-0568
〃　２Ｆジュエリーとくさや　63-0557

ゆっくり見る時間もなく、一巡して急いで旧奥村家の方へ行く。東倉庫の藍栽培の展示をさっと見る。次の体験館では藍染の体験も出来るのだが時間がないのでパスして、奥村家の母屋と離座敷に入る。母屋では人形で藍商売の様子を再現してあった。西座敷は明治二十年の建築だが書院造りの見事な部屋で豪商の豊かさが偲ばれた。藍こなし人形の立つ庭を通って、南と西の倉庫を一巡して門を出る。残念ながら時間がなくて売店へは寄れなかった。

阿波の土柱　藍の館を後にして藍住ＩＣから徳島自動車道へ入り、脇町ＩＣで高速道を降りて阿波町の山麓へ向う。昼食予定の店ではうどんの出来るのを待つ間に見物することになっていて、店員さんの案内で裏山の土柱の見晴し台まで登る。波涛獄の土柱を眺めながら説明を聞く。風雨の侵食で山の斜面に巨大な土の柱が刻まれた一大奇観で、昭和九年国の天然記念物に指定され一躍有名になった。土柱は約百三十万年前の更新世に形成された砂礫層が露出し、長い年月をかけて激しい風雨に侵食され、高さ十数米の土柱が出来ている。波涛獄、橋獄、灯籠獄などの名がついていて数ヶ所に点在している。一ヶ所だけ遠くから眺めて引返し、土柱ランド新温泉で昼食だ。見物している間に出来た名物たらいうどんを賞味する。土産物を買っただけでゆっくるする暇もなく、次の脇町へと引返した。

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL⑥②0036

うだつの町脇町　脇町の郊外を通り、吉野川沿いの道から町の中心部のショッピングセンターへ急いだ。町並の案内を頼んでいたガイドさんが待っていてくれた。バスは駐車場へ先行して待ってもらうことにして、号車別にガイドさんの案内で町並を見学する。藍の一大集落地として栄えた町で、約四三〇㍍の本通りに江戸時代から大正時代にかけて建てられた、藍商人達の五十軒余の豪邸が並んでいて、国の重要伝統的建造物保存地区に指定されている。「うだつ」とは屋根の両側にある袖壁のことで、本来は防火や防犯の目的で造られていたが、何時しか富の象徴として美しく競って上げられた。うだつの様式はそれぞれ時代によって違うらしく、詳しい説明を聞き乍ら独特の景観を楽しむことが出来た。処々で店の中まで見せてもらったり、旧河畔の舟着場跡も見学できた。観光協会に展示された写真や諸資料は見る時間がなくて惜しかった。

三時になったので脇町を後にして帰路についた。徳島自動車道を徳島ＩＣまで走ったが市内見学はすべて省略した。鳴門ＩＣから高速道路を往路と同じ順路で帰った。大相撲の千秋楽のテレビを見たり、岸本さん提供の懐かしのメロディーを聞いたりして予

定通り六時半に山崎に帰った。幸い天候にも恵まれ全員無事研修旅行が出来たことを喜んでいます。遠距離で時間に追われての忙しい旅行でしたが、一応皆様に満足して頂けたと思っています。皆様のご協力ありがとうございました。